

虚の符 17

宝典 二条千河

使い手を失ったことほど
孤独なものはあるまい
幾重もの錠が下ろされた威の奥深く
人目から遠く離れて眠っている
一片の文章
鍵のありかを知る者は無い

伝えられるところによれば
それは美しい詩文ではなく
心躍る物語でもなく
味気ない条文の一節だった
誰もがその文字を読み得た時代には
見向きもされなかったというのに
地上から読者が絶えた今
ついに不可侵の秘宝になった

開かない箱の底で
どんな法理を語っているのか
目二目目、ではなく
和ヲ以テ貴シトナス、でもないとするれば
しかしいずれにしても
破れることすらできないものを
訓えは確かに守られているのだ
夥しい血と引き替えに生まれたものは
どんなに清くてもやはり腥いので
不発弾でも抜うかのように
威の奥深くに封じ込めて
幾重にも錠を下ろし
それから一つずつ錠を失くし
読み解くことは永久に放棄したのだろう
宝典は確かに守られているのだ
あらゆる解釈から、あらゆる穢れから
最も遠いところに眠らされているのだ
手垢一つ無い紙片はいつしか黄色く褪せ
インクの痕は記されたままの形で虫に食われ
空洞化する。
これほど孤独なものはあるまい



海禁今日子

おもいで、と、かるさをたたえる
こは、かつてへ、なびきせん
かれをみているのは、どの子だった？
くるぶしまで、つかった、いまが、きおくだ
うでどけい、はずして、ごらん
かたみだという、さいげつたち
まどろんで、じこく、はなつて、やりきれない
ろうじよう、と、もじをまざる
たてこもつて、そら、みわたせば
かるさに、つれなさか、にあうよう
おもいで、なら、子、おりのでしようか
おしまつて、かまびすしい
ふみしめて、いちだん、いちだん
やましかつたら、どこまで、のぼるよ

かのじよなら、みつめるのは、この子です
くびまで、どつぶり、だから、おもさ
きつと、どうして、かんじなかつたのだろう
どれが、その子
うでの、とけいが、わたしをはずす
かたみがせまい、かるがるしくも
かれを、どんなに、いませんか
おもいでですか、と、みわたせば
あたらしい、ひびき、ききましようよ
かたみ、からみつくから
しじまなんです
うでを、この子は、こんなにも、へびだ
かたときも、さいげつたち
かたむけ、かたがわ、しんせんでしたよ
ろうじよう、と、そらを、たぐれば
どの子が、すすんだ？
とおさうの、ともに、やってくる
よりそのうら、いちぶだけれども、はずしたのに
いわく、かわいて、さびしい、しつちです
くるぶしと、てくびの、きつと、どうして
いない、ひびを、きおぐが、いまだ
さらずに、その子が、あしたを、ききむよ

【往年の野球 graphics における魔球の球筋のような……】

たなかあきみつ

往年の野球 graphics における魔球の球筋のような風邪よ
吊るし釣よばたばた暗く黄ばんだ野晒し鴉の破線の群れ
舌がかりに枕木の梢の虚空に達する折りたたみナイフ
微風のヨコ位置では皺の波がしだいに振動するのに対し
椅子のタテ位置ではもっぱら白熱した視線の檻と化す

あるいはシンドレラ固有の靴先の切尖で
顔面のトポグラフィを点々と隣触せよ、おもむろに
顔面を賭シテ周回するゾコモツテイ線に密着する
干し椎茸の地肌にさらに勢いよく杭打ち
空間のピンクの鉛を、セラフイヌ花に服喪中
干からびた視神経造花のまだ蕾の痣を埋設しろ
次いでその直近にヒトの立ち姿を
矢印のように配置せよ空葉の舟を暫時
階段裏のオブセクション腹を
芒のように衝いて、満天の星屑ラジオの一隅で
たとえば喉のさらなる渴きを承知で強面の
夏こそ塩ふたキャベツのレシビをすかさず敢行せよ
第一線とX線との網目に宙吊りのトレレ捕食
この視線のパシヤパンヤ落し卵をさされる
砂場の倒影にあつても砂紋の査問にさらされる

否応なく蠅螂メタリックに置かれる銀蠅の階梯
色彩の物影、気紛れにくすんだ色合いというより
依然として臨死状態にある物影や物音、
それらのページに滞留するのはあくまでも過剰に
空中ブランコ乗りたる光と影の交替劇ではなく
ヒトの神経を有めにかかる灰色の列柱もどき
空間のエッジにして物体の静態だ
動く鳥影のエッジにして物音の動線だ
偶然耳にしたドリュッシーの take wild にして
靴音の残響のそれでも消えずむせピア座礁よりも

月光は焦げ茶ばむと言えらうか、その色調は？
群れなす埃は空間の底辺にセピア色に沈澱して暗中模索
微細動してはしだいに流む、それゆえ沈黙は闇の心臓だ
獣犬的風貌を堅持しつつその沈黙は深く、沈思にして
黙考のピッチは単調なるがゆえにますます増幅する
張り裂ける闇の裂け目にいきなり沈黙が介入し、時折
闇のフィルムが疼きだし沈黙のラバーソールに差し戻さ
れる、破線の点滅する火焔の雲が沈黙の粒だちが
澎湃としてスターバート・マーテルのように
言葉の倦怠が待機するその空際にかわるがわる隆起する
なぜか《凄腕》広告の筋肉の図解ばかり3人や5人の
肩よりも喉にがぜん筋交いが入っているせいか銅鑼の音
はつとに塵盤になったP盤のアルトやコントラルトも
明形天井めがけてはしやいで曇りガラスにディテールを
引つ攝くよう、音景のオノマトペはさかんに亢進する



ときに
物語の結末をもとめて来る人がある
物語の終わりにあつて
見送るのに
あるいは
背景として
ふさわしい雲を
もとめて
とりわけ――
大きな
かなしいできごとが
あつたときなど

平井達也

自由を行使しなさい

事件は深夜から早朝にかけて起きた。検視の結果、死亡推定時刻は午前4時。直接の死因は頸部を鋭利な刃物で切られたことによる失血。発見時、夥しい血は枯れかけた花びらのように変色を始めていた。
被害者は美しく化粧し、着衣は黒く短いワンピース。手足の爪は海の色に塗られていた。海面に撥ね返る朝陽。爪の色は被害者の身元確認を攪乱しはしなかった。彼は男娼として名の知れた存在だった。性器は切断されており、未だ発見に至っていない。
死体が見つかったのは彼が住む街でも彼が商売をする街でもなかった。捜査は周囲の聞き込みを中心に行われた。同時に警察官らは前夜からの足取りを追う。犯行の夜は霧が濃かった。霧の奥にデリカシーのない音楽を聞いた者がいた。
すぐに被害者の恋人が判明した。その78歳の老医師は自宅マンションで首を吊った姿で発見された。足下で壊れたポータブルデッキが静かにディスクを回し続けていた。マンションは死体発見現場から徒歩5分。マンションが建つ前は無愛想な梅林だった土地だ。
重要参考人は長く大病院で心臓外科医を務めていた。名医として多くの命を救ってきた。家族はいない。週に一度は被害者が商売をする街で遊んでいた。こちらも街で知られた存在だった。
「君になしうる限りの自由を、命がけで行使しなさい」
老医師は若い医学生たちと院内食堂のエスプレッソを飲みながら、いつもそう言っていた。
街の男娼仲間たちは、被害者が殺害される直前に射撃していたに違いないと語り合った。恍惚の直後の虚脱にのみ、老医師が若い恋人の顔を照れる隙があつたのだと。そして汚れた性器への愛しさから切斷したのだと。
噂は捜査員たちの耳にも入った。しかし誰にも本当の動機はわからない。湿っぽい事件だと口々に言っばかりだった。刑事部屋の窓を開けると吹き込んでくる風の乾きが心地よい。
変色した血の跡が路面に残っているの、誰もがその路地を避ける。海は曇つた空にすつと霧をさされている。老医師が犯人であると
する決定的な証拠は見つからないままだ。

わかれのうた

酒見直子

生まれるときも
死ぬときも
ひとりだなんて
私はオニヤンマの翅をあげる
顔なしの言葉を受けとめてしまったあなたに
心の内に広がる淡い緑の地平線に
誰かがコンクリートのビルを建てている
私はウスバカゲロウの翅をあげる
創造することを忘れてしまったあなたに
思い出してごらん
生まれで来たときのことを
はじめて胸に世界を抱いたときのことを
あなたはひとりではなかったね
両手を見つめてごらん
系統樹の幹のやうな手のひら
つながれてきた(いのち)の先端のような指
その手が創りだすものたちが
息をする
ひとりでは生きられないことを
知るために
孤独が
背中を押してくれたように
創りだす(わたし)を
知るために
絶望が
頬を寄せてくれたように
愛すること
知るために
愛されることが
手をつないでくれたように
どんなときも
あなたは祝福されていた

étude 四肆舞 72/92

池田 康

ルビよりも小さい声であなはさきやく
ゆるし はある
ふし はある
しるし はある と
なぜそれがさきやかれなければならぬのか
なにに対するルビなのか
あなたは言わない
ささやくだけ
それとも聞き違いなのか
風があなたを真似たのか
でもたしかにその時
あなたのささきは必要だった
なにが難しい言葉を読むために
大きな苦痛の言葉
闇に沈む重たい言葉
易しいルビで迎えるように
羊一頭
ひまわり二輪
雲雀三羽
ひらめ四尾
トラック五台
豆腐六丁
都市計画七案
トンボ八本
リズム九拍子
隣人十人
陸上自衛隊十一大隊
離婚十二件
ネグリジェ十三着
ネロ十四世
ねむりタイムマシン十五機
ねむれま一夜一夜物語秘本十六話

ブルーベリーの丘で

小島きみ子

朝陽が当る台地では
ブルーベリーが豊かに実り
そのひとは、やさしく微笑んで
(喉がかわかないように、摘みながら食べるのよ)
と、教えてくれた
ほんとうの姉のような親しさで
それでいてどこかとても遠くて
籠がブルーベリーで一杯になると
寂しそうに俯いた

夏草が朝風にそよいで
花びらのような茶色の蝶が
羽化したばかりで音符のように舞っていた
(わたしの家にきますか?)と訊ねたすぐそのあとで
悪い事を思いだしたように(もうかえらなくちゃね)と言うのでした
あそこまで送ってあげるからと
川の淵までくると
なんとも深いお辞儀をして
台地への坂道を上って行くのでした
白い夏のセーラー服を着て髪を三つ編みにした姉
あのときあの人は
ブルーベリーを摘みながらなにかを尋ねただけれども
わたしの周りはたくさん茶色の蝶が舞っていて
わたしはその蝶の写真を撮ることに夢中で 彼女の声を見失っていた
たった一度きりの
はるかな時間を越えてやってきてくれたひとだったのに
もう あの雲の上まで行ってしまった

